

## トルコ騒乱と民主化への影響

### 今回の騒乱の経過

2013年5月末から、トルコでは反政府運動が繰り返されている。最初は、イスタンブールのゲジ公園の再開発に伴い、樹木が伐採されることへの反対運動だった。警察が座り込みをしていた市民を暴力的に排除したことから、市民の怒りが爆発し反政府運動に発展した。機動隊との衝突はイスタンブール、アンカラ、イズミルなどの大都市で繰り返されたが、トルコ社会全体としてみれば、散發的、かつ一部の市民による暴徒化であり、警察がこれを鎮圧している。

騒乱が世界に知られたのは、CNN、BBC、Al-Jazeeraなど外国メディアがかなり大きく報道したためであって、報道の大きさと騒乱の大きさは必ずしも一致していない。

欧米のメディアが集中的に報道したのは、イスタンブールの中心部、タクシム広場（ゲジ公園に隣接する）での機動隊とデモ隊の衝突シーンである。多くの市民が集まり、当初は平和的なデモとしてエルドアン首相への非難と退陣を迫るスローガンを叫んでいた。非難の焦点は、エルドアン政権の権威主義的性格とイスラーム主義的性格にあった。

しかし、騒乱には次第に左翼グループと極右グループなどが入り乱れて参加し暴徒化した。ゲジ公園にも、様々な左翼組織の若者がテントを張って占拠していたが、彼らは抑圧された階級ではなく富裕層の子弟が中心だった。タクシム広場での衝突には、極右トルコ民族主義者も参加した。彼らは、3月来のエルドアン政権によるクルド人武装組織PKK(クルディスタン労働者党)との和解交渉をトルコ国民への裏切りとして非難していた。さらに、軍の政治介入を期待する国家主義者(ulusalci)の一団も、混乱による軍の政治介入を期待して、騒乱に加わった。

エルドアン政権側は6月半ばから強硬姿勢を強め、左翼のみならず、極右、国家主義者、さらには左翼を扇動した一部の財閥に対しても攻撃を強めている。7月中旬には700人以上が逮捕され、180人近くが訴追された。政権は内務省と警察を完全に掌握しており、エルドアン首相は警察による催涙ガスと放水銃の使用を全面的に擁護している。

### 騒乱の背景の分析

この騒乱が、世俗主義を支持する市民によるイスラーム主義のエルドアン政権への反発を含んでいることは明らかである。しかし、そのことはむしろマージナルな争点ではないかと考える。トルコにおける世俗主義勢力というのは、①無神論に立つ「本当の」左翼勢力と②トルコ国家主義の右翼でアタテュルクによる国家原則としての世俗主義(laiklik)の護持を掲げる勢力から成る。今回の場合、エルドアン首相に対する敵意は、両者から向けられていたのであり、単純に、世俗主義 vs. イスラーム主義の構造には当てはまらない。

イスラーム主義政権を崩壊させるために、軍の介入を期待した市民はいまだに存在するものの、これは実現性に乏しい。すでに過去十年の公正・発展党(AKP)政権下で、エルゲネコン、バリョズという二つのクーデター未遂計画が摘発され、軍幹部のみならず、国家主義者のジャ

ーナリストや実業家にいたるまで、軒並み、訴追され係争中である。エルゲネコン事件の方は、未だ真偽のほどは不明だが、社会を不安に陥れるためのテロ等の暴力が多数企図され、結果的に軍の政治介入を期待するものであった。

単純な意味でのイスラーム主義批判は、現在のトルコにおいて力を持っていない。しかし、エルドアン政権側が強権的性格、とりわけ政権に批判的なマスコミに対して強硬な弾圧を加えてきた点については、世俗主義派、イスラーム主義派の双方から批判を受けている。今回のデモや騒乱の表には出なかったが、イスラーム保守層もまたエルドアン政権への批判を強めているのである。子どもを3人以上産めというような私的領域に関する首相の発言は、世俗派、イスラーム派を問わず、批判を浴びている。この点をエルドアン首相が軽視すると、今後の政権運営と憲法改正作業はかなりの困難が予想される。

(内藤正典、同志社大学)